

ISSN 0919-1518

一九九九年四月

文化財學報

第十七集

光森正士先生追悼記念論集

奈良大学文学部文化財学科

光森正士先生を悼む — 脈々と息づく学灯の中で —

悠々たる大人、しかもこと細かくお心づかい下さる—初対面の先生から受けた強烈な印象である。前任の井上正先生が大学を去られるにあたって、私共は「是非、井上先生の信頼して居られる方をご推挙下さるよう」お願いしたところ「退職する者が推薦するのは如何か」と仰りながらも「奈良国立博物館の光森さんがね」とのこと、人事は難しい。毛利久先生以来の伝統ある学風をどのように継承し、どのように発展させて下さるか、という問題が最大の課題。井上先生のご推挙、学科あげて賛成、こうした雰囲気の中で、光森先生をお迎えする運びとなった。

着任された先生のもとに、嬉しいことにすぐれた学生達が集まった。研究室の扉は常に開き、学生達の笑い声が流れ、遅くまで室内灯煌々、その中で低い穏やかな先生の声が間々きこえる…。静かな研究室もいいもの、しかし活気溢れる研究室もいいもの。実に明るく学ぶ、集い学ぶ、教育という言葉にぴたりの研究室が誕生したのである。

やがて、先生は小佛像や種々の文物を研究室に持参下さり、「実物を前に」の教育をくりひろげられるようになり、遂に二メートルを越す平安時代の仁王像まで登場、驚く学生を尻目に調査法や研究の実際を教えられた。地の利のよい奈良でもこれ程目の前で、手に触れられる仏像はないだけに、この大像から学生が得た学恩は測り知れないものがある。

先生は着任時、体調不調、尼崎の寺坊からの通勤を心配されていた。しかし、こうした先生の真摯な教育者としての御姿、慕い共に行動する学生の活発な姿に接しているうちに、病態が悪化されて居られるとは夢にも思わず、むしろ御回復の途次にあられると私達は勝手に信じてきた。活潑に動かれる先生の病いの強さを私達は突如として知った。叩いても返事のない先生の研究室の扉を開けると、先生は机に伏せられ、血が止まらないんだとのこと、机上も衣服も流れる血で真赤、驚き病院を手配、私達が先生の御病状の深さを知った最初の瞬間であった。

しかし、先生は退院後も学生を率いて加古川市の鶴林寺や太子町の斑鳩寺、猪名川町の美術工芸に取組まれ、次々と成果を挙げられた。伴って学生も育ち、大学院が設置されると学究の道を歩ませようと一層時間を惜しみ学生を指導される、その激しい動きは畏敬の念を深め、かつてない、よく一致して研究室を護り学問を深め人格を育くむ学生達を輩出することとなった。

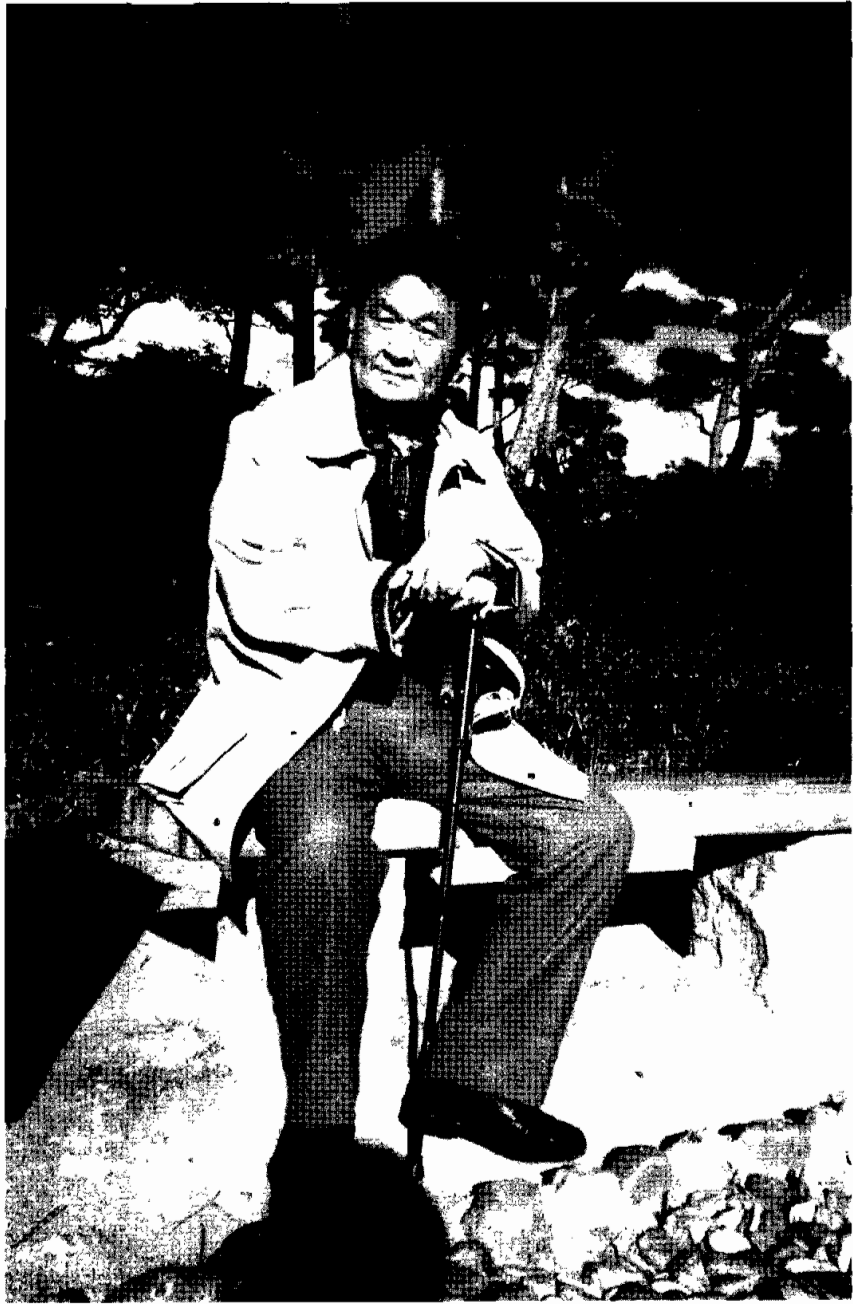
先生は亡くなられた。余りにも大きな損失、痛手である。信じられない想ひが今だにのこっている。後任には先生ご推挙の灰野先生がご着任

下さり、脈々たる学統は引きつがれ、雰囲気も明るく、楽しさとともに継承されている。ありがたいことである。学生達は先生没後も再三再四、先生の御宅を尋ね、今も先生と共にあることを確認するかのようなようである。よき後継の先生を得、よき学生が生まれ、よき研究室がつがれていく、まさに光森先生の人徳と熱意の表れである。幽明境された悲しみの一方に、すばらしい「果」を得られた先生を羨ましく想う日々でもある。

悠々たる大人の風貌と優しい目で、長く、奈良大学を見守って下さるよう、改めてお願いする次第である。

平成十一年四月十日

水野正好



光森正士先生御遺影



光森正士 画